

平成28年度 全国学力・学習状況調査における

北九州市立 八枝 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

(1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none">・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

(2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

(1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	10.4	70	5.6	56	12.1	76	5.8	45
全国	10.9	73	5.8	58	12.4	78	6.1	47

(2) 本校の学力調査結果の分析

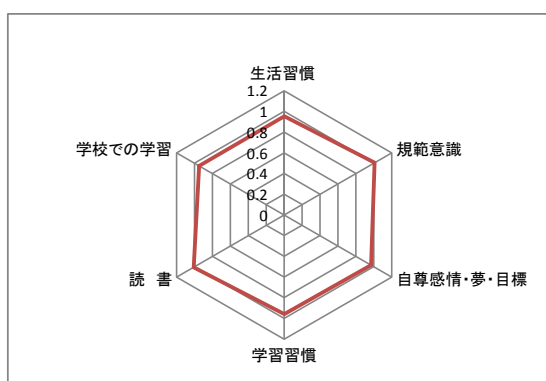
国語A	全体的な傾向や特徴など	・ローマ字を書いたり、読んだりする問題に課題があり、定期的に復習するか、外国語活動で書いたり、読んだりする活動を位置づける。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	学年別漢字配当表に示されている漢字を正しく書く問題の正答率が高い。	
	努力が必要な問題	ローマ字を正しく書いたり、読んだりする問題の正答率が低く、無回答率が高かった。	

国語B	全体的な傾向や特徴など	・全体的に、「書く」領域の正答率が全国平均正答率よりも高かった。また、選択式や記述式の問題形式も全国平均正答率よりも高かった。 ・正答率が高いが、無解答率も高かった問題があった。できる、できないの二極化にならないように、低学力層の底上げが必要。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	グラフを基に、分かったことを的確に書く問題の正答率が高い。	
	努力が必要な問題	活動報告文において、課題を取り上げた効果を捉える問題の正答率が低い。	

算数A	全体的な傾向や特徴など	・「単位量当たりの大きさの求め方の理解」や「図形の構成要素に着目した図形の構成」が全国的平均正答率よりも低かった。 ・正答率が高い問題でも、無解答率も高い問題があった。できる、できないの二極化にならないように、低学力層の底上げが必要。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	繰り下がりのある減法の計算、末尾の位がそろっていない小数の加法の計算、小数の除法の計算の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	1を超える割合を百分率で表す場面において、基準量と比較量の関係を理解する問題に正答率が低く、無回答率が高かった。	

算数B	全体的な傾向や特徴など	・数量関係の問題の正答率は高かったが、図形の問題の正答率が低かった。 ・示された事柄が正しくない理由を書いたり、与えられた条件を基に式の意味の説明を書いたりする問題の正答率が低い。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	2つの数の関係を式に表す数量関係や二つの表を基に読み取ることができない事柄を特定する、数量関係の問題の正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	グラフから必要な情報を読み取り、それを根拠に、示された事柄が正しくない理由を記述する問題の正答率が低かった。	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<ul style="list-style-type: none"> ・友達の前で自分の考えや意見を発表することが苦手な児童が多い。 ・全国に比べ、携帯電話やスマホの所持率の割合は低いが、1日当たりテレビゲームやスマートフォン等を使ったインターネット等を4時間以上している児童が多い。 ・全国に比べ、家庭学習を一日当たり30分以下、全くしない児童の割合が大きい。また、自分で計画を立てて勉強している児童が少ない。 ・全国に比べ、授業の中で分からないことがあったら、家の人に尋ねる児童の割合が高い。授業で分からないところがあるからといって、学習塾に通う児童は多くない。 ・全国と比べ、家の人と話したり、家の手伝いをしたりする児童が少ない。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<ul style="list-style-type: none"> ・ローマ字を3年生以上で定期的に、朝自習等を利用して書いたり、読んだりする練習に取り組む。特に、高学年では外国語活動の学習の中で取り組む。 ・各学年で4「図形」や5年生以上で「単位量当たり」に関する問題を、朝自習等で過去問題やアシストシート等を利用して何回も復習に取り組む。 ・全学年で、どの教科でも話し合い活動の場を意識して設定し、児童が意見交換をしたり、発表や説明をしたりする機会を増やす。また、キーワード等をもとに説明文や振り返り文を書いたり、発表したりする時間を授業で確保し、自分の考えを書いたり、発表したりすることを習慣化する。

② 家庭生活習慣等に関する取組

<ul style="list-style-type: none"> ・校内で各学年の家庭学習の時間を提案し、自主学習も含め家庭学習の充実に向けている。また、継続して「家庭学習チャレンジハンドブック」を活用するメール配信も行っている。本校独自の家庭学習マイスター賞を企画し、学期ごとに表彰し、家庭学習の取組を啓発する。 ・学校通信やいっせいくんメール等を活用し、継続して家庭教育学級の紹介や地域行事の紹介を発信し、家族で過ごす時間ももちやすくなる。 ・ICTサポーターを活用し、学期ごとに情報モラルやマナーの向上に向けての指導や啓発学習を継続する。また、家庭への啓発プリントを配布する。
--